

三鷹市教育長賞

当たり前の光をたどって

おおさわ学園三鷹市立第七中学校

三年 吉岡 萌乃佳

私は、朝起きますと、まずスマートフォンで天気予報をチェックします。通学路はいつもきれいに舗装されています。学校に着けば、冷房の効いた教室で、真新しい教科書を開きます。放課後には、友達と話をしたり、近所の市民体育館で運動をしたりします。帰宅時では、夜道を明るく照らす街灯の下を、安心して歩くことができます。これらは、私にとって生まれたときからずっと「当たり前」でした。毎日変わりなく繰り返される、ごく普通の日常です。しかし、ある日、ふと疑問に思いました。どうしてこの「当たり前」は、こんなにも安定しているのだろうか、と。

そのきっかけは、テレビのニュースで見た、ある地域の災害の映像でした。そこでは、道路が崩れ、橋が流され、多くの人々が電気や水道のない生活を強いられていました。画面の中の光景は、まるで映画のようでした。しかし、それは現実であり、同時に、私の日常がどれほど恵まれているかを突きつけられるような思いでした。この安全で便利な生活は、一体誰が、何によって支えているのだろうかという疑問が、頭の中で渦を巻きました。

調べてみると、この「当たり前」は、私たち一人一人が納めている「税金」によって支えられているのだということがわかりました。その言葉を知った瞬間、私の目の前にあった世界が、それまでとは全く違う色に見え始めました。一つ一つの風景に、見えない形で税金が使われていることに気づいたのです。

朝、通学路の横を走っていくパトカー。それは、私たちの安全を守るために働く警察官の給料や、パトカーの維持費、そして彼らが使う様々な装備に税金が使われているからこそ、見ることができる光景なのです。学校の冷房や教科書だけでなく、体育館のボールや理科室の実験道具など、私たちが学ぶために必要な備品一つ一つにも税金が使われていると知り、驚きました。毎日何気なく使っていた水道や、家の近くを走るバスも、税金が使われています。それは、一部の人だけが恩恵を受けるのではなく、そこに住む誰もが、等しくその恩恵を受けられるようにするための「公平な支え」だったのです。

税金は、ただ単に徴収される「お金」ではありません。それは、私たち一人一人の「思いやり」や「願い」が形になったものなのだと思います。そして、それは巡り巡って、いつか私が誰かを助ける側になったときに、また誰かの「当たり前」を支える力になります。税金は、私たちが見えないところで、互いを支え合う、温かい絆のようなものなのです。

いつか私も大人になって、社会の一員として税金を納める日が来ます。私は胸を張って、この町を、この国を、そして未来を支える一員として、自分の役割を全うしたいです。そして、今私が享受している「当たり前」の光を、次の世代にしっかりと手渡していけるよう、税金の意味を考え続けたいと思います。